２０１９年６月

Funai Scholarship 留学報告書

学部奨学生　藁谷二千翔

１．はじめに

２０１９年１０月からイギリスの University of Cambridge Sidney Sussex College の Natural Sciences で学ぶ予定の藁谷二千翔と申します。Natural Sciences では最終的に物理学を専門的に学んでいきたいと考えています。今回、最初の報告として、私がイギリスの大学で学ぶという決心をしてから合格に至るまでの過程を紹介させて頂きたいと思います。

２．イギリスへの長期留学

私は２０１５年に埼玉県立浦和高校に入学し、高校三年の九月から長期留学生として、姉妹校であるイギリスの Whitgift School に留学をしました。浦和高校では、例年、Whitgift School への長期留学プログラムに生徒を送り出しており、私もその一人としてイギリスの現地校で学ぶ機会を得ることができました。浦和高校には留学プログラムがいくつか存在すること自体は浦和高校の入学以前より知っていたことでありましたが、私が留学に強い関心を示すようになったのは、入学後のことでした。私は幼いころ、父の仕事の関係でアメリカに住んでいたこともあり、入学当初は、留学は一つの可能性として考えていたものの、一人で留学することへの不安や将来の夢が不透明であったことから、自分は行かないだろうと思っていました。しかし、学校の学年集会などで実際に留学プログラムを修了しイギリスの大学で学ぶ先輩方などの話を聞き、更に Whitgift School のサマースクールに留学する短期プログラムに参加したことで、留学への思いが燻ぶられ再び海外で学んでみたいと思うようになりました。加えて、浦和高校で教えられた、「世界のどこかを支える人材になる」という理念や、仕事の関係で世界中を飛び回る父親にも影響されたと思います。

３．インターナショナル・バカロレア ディプロマ（IB Diploma）について

イギリスの多くの高校では二年間かけて、IB または A-Level というコースで学びます。私が Whitgift School で学んだのは IB で、A-Level と比べて、少し大変であると評価されています。というもの、A-Level では自分が進みたい分野に関わりのある教科を最低三つ取るのに対し、IB では、文系、理系、言語を含む多様な教科から最低六つ取らなければならないからです。深く学びたい教科を三つ Higher Level（HL）として、それ以外に三つ Standard Level(SL)として取ります。なので、A-Level と比べて、生徒の時間管理能力が問われると言えます。私は、物理、数学、化学を HL として、日本文学、経済学、英語、を SL として取りました。

大学受験では IB、A-Level どちらのコースでも同じ学力のレベルを要求されるので、イギリス人の多くは三科目に集中できる A-Level を取るようです。しかし、自己推薦文を書く

上で IB だと大学受験で少し有利になると考えている人や、海外受験も考えている人、または A-Level では物足りなく色々な教科を学びたいと考える人は IB を選択するようです。最近は、日本の大学でも東京大学や京都大学も含め、入試に IB score を採用する大学・学部が増えてきています。

４．物理学への関心

私がなぜ物理学を学びたいのか、その起源をたどると幼少期のアメリカでの生活から始まると思います。小学生の頃から私は科学全般に興味があり、よく科学に関するテレビ番組や本などを読んでいた記憶があります。特にアメリカの番組は科学だけを特集したものが多く、数式など詳しい内容がよく分からずとも見ていました。そして、その番組を通じて科学が自分の生活にもたらす影響を知った私は科学に関心を示すようになりました。また、小さいころから謎解きやパズルなどが好きで、算数そして数学にものめり込むようになりました。

高校二年になってはじめて物理を学ぶようになると、私は物理学にはそれまで好きであった、科学と数学が両方バランスよく織り込まれていると感じ、魅力的な学問であると感じました。さらに物理学を学んでいく内に、物理学が世界を数学的にモデリングする様に魅力を感じ、より深く学んでみたいと思うようになりました。さらに、昨年亡くなった論理物理学者、スティーブン・ホーキング博士のことを学校の課題の一環として調べ、イギリスで物理学を学んでみたいと考えるようになりました。現在は、未だ漠然としておりますが、量子力学の情報関係への応用、素粒子、エネルギー関連に興味があり、将来的にはその関連の研究をし、世の中に貢献したいと考えています。

５．ケンブリッジ大学を志望

イギリスでは、University of Cambridge、University of Oxford と合わせて Oxbridge と呼ばれており、名門大学して最も名高く評価されています。イギリスの大学受験は UCAS というシステムを通して行うのですが、どちらか一つしか選ぶことはできません。これは、各大学の志望者を少なくし、生徒に志望大学を真剣に考えさせるための措置と言われています。Oxbridge の一つの特徴としてスーパービジョンという（Oxford ではチュートリアルと呼ばれる）制度が挙げられます。これは、大学の普通の講義に加えて、各カレッジにおいて少人数（１～３人）で教授か講師から直接教えてもらえるという制度です。これによって、分からないところなどを集中的に学べるようになっています。

私が本格的に Cambridge を第一志望とするようになったのは、Whitgift School に入学したあとでした。はじめは、イギリスの受験制度や大学の実際の様子などが全く分からず、自分にはふさわしくない狭き門であると思い込んでました。しかし、実際にイギリスの現地校で学び、Oxbridge にも自分の足で訪れたことで、その感情は薄れ、世界中から集まる優秀な学生達と共に学びたいという気持ちが強くなりました。Oxford とも迷いましたが、同じ留

学プログラムを経験した先輩方や Whitgift School の先生の話も聞き、Cambridge を第一志望に決めました。私が学ぶ予定の Natural Sciences では一年目に、化学や地学、生物学など物理以外も履修することができ、Oxford には Natural Sciences はないため、私は Cambridge に惹かれました。

６．ケンブリッジ大学受験の流れ

まずは UCAS の説明をしたいと思います。UCAS では最大五個までの大学を同時に志望することが出来ます。自己推薦文、一年目の成績を基にした predicted grade、各先生からの推薦文が志望するすべての大学に送られ、書類選考されます。大学によっては、追加の書類試験や面接試験があり、オックスブリッジの学部は大抵両方ともあります。これらの結果を基に conditional offer または unconditional offer が出されます。Conditional の場合、IB や A-Level の最終的な点数などに関する条件が提示され、それを満たすことで合格が決まります。Unconditional の場合、IB や A-Level の点数を下げない限り無条件で合格できますが、オックスブリッジでは大抵は conditional offer しか出ません。

続いて、私のケンブリッジ受験の大まかな流れを説明したいと思います。オックスブリッジ志望の場合、10 月の中頃に必要書類を UCAS に提出します。大学やカレッジによっては追加の書類を郵送する要求されますが、大部分はインターネット上で行われます。書類選考が通ると、10 月の終わりにペーパーテストを受けます。学部ごとに異なる試験があり、私は Natural Sciences Admissions Assessment を受けました。さらに進むと、12 月の上旬に面接試験を受けます。面接は、各カレッジで行われます。自分が予め志望したカレッジの場合もあり、そうではない別のカレッジで受けることもあります。私は自分が志望したカレッジで受けることができ、それぞれ二十分ぐらいの面接試験を二つ受けました。面接官はカレッジの教授で物理・数学そして化学に関する問題を出され、それをどのように解くかを見られました。生徒にとって未知の問題を出す場合も多く、その時はいかにして知識を応用し、問題を解くか、そして詰まってしまった時にどのように対応するかを評価されます。1 月の第二週あたりに試験結果が発表され、ここでオファーがもらえるか否かが決まります。例えば IB ならばの合計点数の４５点数中４２点 かつ HL でそれぞれ 7、7、6 点以上を取ることなどです。前にも説明した通り、このオファーを満たして、はじめて合格となります。また、海外の学生にはこれに IELTS で一定以上の成績を取ることが求められます。他にも、学部によっては別の試験、数学であれば STEP で一定以上の成績を取るように言われる場合もあるようです。Natural Sciences を志望した私の場合、IB score と IELTS score がオファーで要求されましたが、他の試験は受ける必要がありませんでした。

1 月以降は、基本的にオファーの条件を満たせるように勉強をします。試験対策としては主に、各科目の重要な点を自分なりにまとめ直すことで復習をし、過去問を解くことで問題の傾向をつかむようにしました。また、五つの大学の全てのオファーの結果が出揃ったら最終的に二つの大学までに絞りこみます。私は Warwick、 Durham、 Liverpool University からもオファーをもらえましたが、Cambridge を第一志望に、第二志望として Imperial College London を選びました。 1 月から 4 月の終わりまで試験勉強に励み、5 月に約三週間に渡り IB の最終試験があります。試験は科目ごとに二つまたは三つの paper があり、一日最大三つの paper を受けます。私の場合、試験日はかなり偏っており、最初の日本文学の試験からおよそ一週間空いて、そこからほぼ毎日試験が続きました。試験を終えた現在は 7 月の結果発表を待っている状態です。このように、受験の選考過程は、日本とは異なり、出願から合否確定までは実に九か月かかる長期戦です。

一段落ついた今、この二年間の IB Diploma を学業面で振り返ってみると、一年目はイギリスという新しい環境に慣れ、IB の科目の勉強に集中できたと思います。二年目は IB の仕上げに加えて、大学受験(UCAS や面接試験など)があり、自分の目標をより明確にできた反面、かなり忙しい一年でした。まだ試験結果は出てませんが、やり遂げた達成感と今後の大学生活への期待に胸を膨らませています。

７．最後に

最後に、私を選考して下さった船井財団様に厚く御礼を申し上げたいと思います。財団様の支援によって、より一層、大学勉学に集中し励むことが出来ると存じ上げております。偉大な先輩方に見習い、その素晴らしい功績に恥じぬよう、精進して参りたいと思います。まだまだ未熟な私でございますが、どうか応援を宜しくお願い致します。